



採鉱

環境
自然

広瀬 幸平

4
まいんこあしたにしゅうどうしょあと
小足谷収銅所跡

小足谷収銅所

しゅうどうしょ
収銅所

は、坑内から排水される銅、鉄などの重金属を含む水(坑水)を処理する所です。

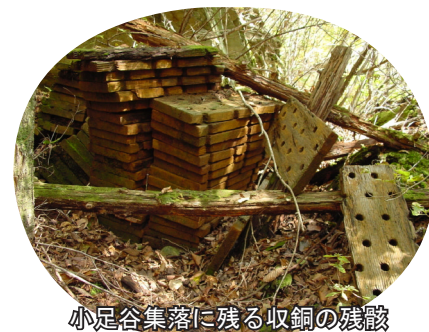
明治30年代の小足谷収銅所
別子銅山記念館所蔵昭和38年撮影
別子銅山記念館所蔵一世紀の難工事を超え
悪しき谷川を清き流れに

広瀬幸平は明治9年(1876)4月に湿式収銅法伝習のために山名純平、加藤徹二の職員2名を工部省に派遣しました。

そして、同年12月に、工部省御雇のイギリス人鉱山技師であるゴッドフレーの技術指導に基づいて、両名によって沈殿銅の試作と坑水の処理に成功しました。

別子山中から流れる川を、別子山側も新居浜側もともに足谷川(悪しき谷川が本意)と呼んでいることから明らかですが、坑水による汚染に悩まされていた下流域の農民にとっても、この坑水処理の成功は画期的なものでした。後に、これらの技術は東平収銅所、山根収銅所などに活かされることになりました。

現在は小足谷集落跡に収銅施設で使用したと思われる残骸があり、足谷川を挟んで対岸には収銅所の石組みが残されています。



小足谷集落に残る収銅の残骸

小足谷疎水坑口
明治14年(1881)撮影
別子銅山記念館所蔵こあしたにそすいどうあと
小足谷疎水道跡は、ここから少し上部にあります。

小足谷疎水道は、坑内の排水問題に対処するため、寛政4年(1792)に開さくを開始しましたが、難工事のため、168メートルで中断し、その後、広瀬幸平により明治元年(1868)に開さくが再開され、明治13年までに全延長864メートルのうち約613メートルが開さくされました。

明治13年に別子本舗(歓喜坑、歓東坑の両坑とその周辺の主要鉱山施設を含めた一帯)においてダイナマイトの実地試験を実施して好成績を得たことから、明治15年から小足谷疎水道開さくにも使用し、明治17年11月13日に貫通しました。

